

2024年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書

2025/9/30

団体名	一般社団法人ふくおかFUN	活動タイトル	地行浜いきもの学校
活動対象地域における生物多様性の保全に関する現状と課題			■活動風景
<p>2017年度から2019年度までの3年間、当団体と福岡市環境局保健環境研究所(現：保健医療局)において共働事業「地行浜いきものプロジェクト」を実施した。同プロジェクトは、人口約164万人を有する福岡市に面した博多湾の環境保全・創造に向け、主体的に行動する市民を増やすため、市民の環境保全や生物多様性の保全に関する意識向上を目的として実施したものである。福岡市的人工海浜【地行浜】において市民参加型の取組み（竹漁礁設置やアマモ場づくり等）を実施しながら、当団体の潜水士による定点観測を継続し、行政や有識者と共に生態系の調査を行っていた。</p> <p>人工海浜でありながらも約80種の生物（魚類・海岸生物・海底生物・海藻・海草）を観測し、啓発活動を行っていたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて啓発イベントの開催が不可能となり、さらには、この地行浜において「世界水泳福岡2023」が開催されたため、地行浜における環境啓発の場づくりは停止せざるを得ない状況となっていた。</p> <p>福岡市民にとって【地行浜】は身近に存在する海でありながらも、その距離（近さ）や、その水中世界の魅力や課題を認識している人々は少ない現状が続いている。</p> <p>世界水泳が終了した現在、再びこの【地行浜】をフィールドとして環境啓発活動を実施することで、都市部の身近な海にも存在する海洋環境問題を考える契機づくりを行い、身近な海の水中世界を「見える化」しながら魅力と課題を次世代へと伝えていくことが重要である。</p> <p>また、都市部の閉鎖性海域は海洋環境問題は雨の大型化・水温の上昇・海洋ごみの存在・アオサの大量発生など多岐にわたる影響により生物多様性が喪失されているため、一過性の活動では解決することが難しい。今後はこれらの問題を理解し、中長期的に海洋環境問題に取り組む活動者を育成していくことで、課題解決へと繋げていく必要がある。</p>			
<p>■活動報告</p> <p>2024年12月から2025年8月にかけて、福岡市保健環境学習室（まもるーむ福岡）および福岡市海浜公園指定管理者マリン・博多湾環境整備共同事業体と連携してサイサイドももち海浜公園 地行浜地区に生息する生物の魅力を知り、その生物たちの生息空間を守る気持ちを醸成するため、小学生10名を対象とした5回連続講座「地行浜いきもの学校」を実施した。</p> <p>各プログラム後、参加者はワークシート（アンケート）を記載し、その内容をもとに自らが関心を抱いた海洋環境の魅力や課題を他者へ向けて発表することができた。</p> <p>また、参加者の写真やインタビューを当団体のホームページや各SNS媒体により発信することで、参加者の活動意欲向上や地域住民の環境意識向上につなげた。</p> <p>【5回の講座内容】</p> <p>1回目：入学式＆いきもの観察／2回目：マイクロプラスチック万華鏡づくり／3回目：海を元気に！海草の森づくり／4回目：シュノーケリング体験／5回目：学びの発表＆卒業式</p>	<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p> <p>【アマモ場づくり】 地行浜において潜水調査を行い、選定した適地において710本のアマモ苗を植付け、約1,000粒のアマモ種子を投げ入れた。アマモの役割や水中生物との関連性を認知したことにより、アンケートの結果、「海や海の生きものごとを大切にしたいと思った」と回答した参加者が100%であった。</p> <p>【シュノーケリング体験】 当団体のプロダイバーによる安全管理のもと、シュノーケリング体験を行った。参加者満足度は87.5%であったが、参加者全員がそれぞれの手法（作文・アート制作・紙芝居など）によって水中世界の発信者となる契機となった。</p> <p>【まとめ】 全5回のプログラムを通して、参加者が自らの生活のなかで海洋環境を保全するための行動を考え、また、その想いや感じたことを発表するための気持ちを醸成することができた。事業実施終了後にはなるが、福岡市環境局環境政策課と連携して2025年10月26日に開催される「環境フェスティバルふくおか2025」を発表の場として、参加者と連絡を取りながら企画を進めている。</p>		
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・連続講座を実施する場合、各回において修了証を授与することで学びの時間を過ごしたことへの自信や次回へのモチベーションにつながる。 ・ワークシートを活用しながら発表の場を設けることで、参加者は自分の考えていることを整理して発信することができる。 ・参加者の自由な表現方法に寄り添いながら発表の場を創出することで、言葉や声で発表することが苦手な参加者にも表現活動への意欲を高めることができる。例えば、学んだアマモの特徴などを口頭では上手く伝えることができなかった参加者が、サンドボックス型のゲーム内において立方体のブロックを使って表現し、それを自主的に発表することができた。 ・学習の形式を連続講座にすることで、参加者同士のコミュニケーションが活発になり、互いの学びのフォローがみられ、自発的な行動を促す機会になる。 	<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもから大人まで幅広い世代が継続的に関わる学びの場を増やすことや、体験を通じて自然と暮らしのつながりを実感できる仕組みが十分に整っていない。 ・環境データや活動成果を誰もが理解しやすい形で共有し、地域社会全体で課題意識を持てる情報発信の工夫が必要である。 ・環境活動を支える財源や人材を安定的に確保し、将来的には地域内で自走できる体制を構築することが必要である。 ・学んだことのアウトプット方法が「スライド」「ポスター」「口頭」での発表に限らず、多様な表現を受け入れることのできる場が必要である。 		
<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p> <p>この1年間の活動を通じて</p>		<p>「海への想い」を発信する子どもたちを育成することで、子どもたちや保護者とのコミュニケーションを深めること</p> <p>を達成しました。</p>	
<p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・参加者が当団体主催の別イベント（シュノーケリング体験やクリーンアップ活動）にも自主的に参加して、海を体感したり保全する行動を起こした。 ・参加者が自分なりの表現方法で海洋環境保全に向けた想いを発信することができた。 			